

古典芸能研究センターからのお知らせ



古典芸能研究センターが現在取り組んでいる研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」(文部科学省平成25年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」採択)では、日本有数の古典芸能関係コレクションを所蔵し、貴重な民俗芸能の宝庫である兵庫(摂津・播磨)に位置する本学の有形無形の資産を生かした研究拠点づくりを目指しています。

企画展「謡のたのしみー謡う・聴く・読むー」

平成29年4月25日(火)～6月30日(金)、古典芸能研究センター展示室で、企画展「謡のたのしみー謡う・聴く・読むー」を開催しました。江戸時代、幕府の「式楽」であった能は、上流武家や公家以外の庶民にとっては、なじみの薄いものでした。しかし、劇としての能とは違って、能の詞章を謡う「謡」は、能の上演を見る機会がほとんどない町人階級まで広く親しまれていました。こうした、謡を謡い、謡を聴いて楽しむという文化は、近代以降も受け継がれていきます。この展示では、「謡」に焦点をあて、近世から現代に至るまで、多くの人々がどのように謡を楽しんでいたのか、さまざまな方面から紹介しました。



特別講座「源氏物語と芸能」

企画展「源氏物語の広がり～古典芸能の世界へ～」

古典芸能研究センターでは、神戸女子大学・神戸女子短期大学オープンカレッジ秋期講座で特別講座「源氏物語と芸能」を開講しました。それにあわせて、展示室では、企画展「源氏物語の広がり～古典芸能の世界へ～」を開催しました。

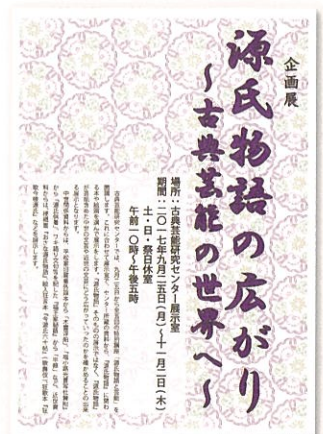
特別講座「源氏物語と芸能」

期間 平成29年9月25日～10月30日 毎週月曜・全5回と10月28日(土) 能楽鑑賞会

- 講座内容**
1. 源氏物語と平安文化
北山 円正(古典芸能研究センター兼任研究員・神戸女子大学文学部教授)
 2. 源氏物語と能
大山 範子(古典芸能研究センター非常勤研究員)
 3. 能(野宮)の構想
樹下 文隆(古典芸能研究センター兼任研究員・神戸女子大学文学部教授)
 4. 演者に聴くー観世流シテ方上田拓司氏を迎えてー
上田 拓司氏(観世流シテ方)
聞き手:長田あかね(古典芸能研究センター非常勤研究員)
 5. 源氏物語と近世の浄瑠璃
川端 咲子(古典芸能研究センター非常勤研究員)

10月28日(土) 上田観正会能楽堂 ※入場料自己負担

能楽鑑賞会「(野宮)の舞台を観る」(観正会定式能観能)
解説・案内:長田あかね



公開研究会「古典芸能研究の横断と総合」

古典芸能研究センターでは、研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」のまとめとして、11月25日（土）に公開研究会「古典芸能研究の横断と総合」を開催しました。

公開研究会「古典芸能研究の横断と総合」

- 日時** 平成29年11月25日（土） 11時～17時
- 場所** 神戸女子大学教育センター 5階特別講義室
- 主催** 神戸女子大学古典芸能研究センター研究プロジェクト
「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」

【講演】 「世界の中の日本芸能」
時田 アリソン（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所長）

【シンポジウム】 テーマ「古典芸能研究の横断と総合」

「中世芸能の宗教的背景—伊藤正義文庫と中世宗教テキストの世界から見えるもの—」

阿部 泰郎（古典芸能研究センター客員研究員・名古屋大学大学院文学研究科教授）

「能楽研究の現況と課題—『風姿花伝』奥義の「奥義」の意味とそれをめぐる問題をめぐって—」

天野 文雄（古典芸能研究センター客員研究員・京都造形芸術大学舞台芸術研究センター所長）

「民俗芸能へのまなざし／民俗芸能からのまなざし」

川森 博司（古典芸能研究センター長・神戸女子大学文学部教授）

【討論】 時田・阿部・天野・川森＋フロア
司会：藤田 隆則（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授）



平成29年度
スタート


ホームページ新連載「今月の資料」

古典芸能研究センターのホームページで、センターが所蔵するさまざまな資料を毎月1点紹介することになりました。和書・洋装本・雑誌などジャンルを問わず、センターが持つ幅広い資料を積極的に紹介していきます。開催中の展示の宣伝を兼ねて資料を選ぶこともあります。トップページに掲載していますので、ぜひご覧ください。

11月の資料

古典芸能研究センター所蔵の様々な資料の中から、毎月1点紹介します。

吉浄権願(紀三井寺)



**志水文庫蔵
中本一冊 絵入十七行本**

宇治加賀屋の浄理撰『紀三井寺願基』(上方版・五段本)を江戸で穴段本を多数刊行していた遠油町の村田屋である。上方版の『紀三井寺願基』には八行本と絵入十七行本が現存し、八行本の刊記に「貞享五年庚午吉祥日」とある。江戸版の刊記は不明であるが、刊記の「正月吉祥日」上部に「厚」の最初の二画とおぼしい跡が見える。内容は和歌山の紀三井寺開山縁起で、主人公の姫君の恋と愛憎、恋敵の女性の怨霊事、神仏の奇理などが盛り込まれた物語である。挿絵や本文からは、からくりが多用されたことが見える。江戸版は、本文・挿絵ともに上方版を省簡したもので

平成29年
5月刊行

『食満南北著『大阪藝談』』刊行記念展示

けまなんぼく
「食満南北」図録 刊行

古典芸能研究センターでは、開設15周年記念事業の一環で昨年度に開催した「食満南北」展の図録を、平成29年5月に刊行しました。この展示は、開設15周年記念のメイン事業であった『食満南北著『大阪藝談』』(神戸女子大学古典芸能研究センター叢書2)の刊行を記念して講演会とともに企画し、新聞各誌に取り上げられ、大勢の見学者を迎えて好評を得ました。図録には、『大阪藝談』の原稿をはじめとするセンター所蔵の南北関係資料や、展示で借用した他大学や個人所蔵の南北の書画なども掲載しています。ご興味のある方はセンターまでお問い合わせください。(非売品) 古典芸能研究センター TEL:078-231-1061 (直通)



科学研究費助成事業（科研費）に採択された研究紹介

「糖尿病患者へのエンボディメントケア」の
効果検証とその実用化への方略の検討

研究期間：平成 25 ～ 28 年度

研究種目：基盤研究（B）

神戸女子大学 看護学部 看護学科 教授 野並 葉子

今回紹介する研究は以下の科研費を得て継続発展させたものである

平成 16～19 年度 基盤研究（B）「糖尿病患者へのヒューマン・ケアリングアプローチの有用性の検討」

平成 20～24 年度 基盤研究（B）「糖尿病患者へのエンボディメントケアの実用化の検討」



この研究は、約 20 年の時間を経て、看護ケアの介入による評価研究が可能となったものです。1998 年からおよそ 10 年間は、高度な看護の専門的知識・技術を持った実践研究者の育成に費やしました。実践科学としての看護学の研究では、ヴァイツェッカーが「『生命と関わりあう』というの、研究者自身が生きている主体として、同じく生きている主体である生きものとの相互主体的に関わるということだ」といっている技能が研究者に必要です。さらに、「看護学は、人間を生活する主体としてその生活の営みの中で捉える」という前提に立っていることも忘れてはなりません。前任校でまず 1998 年より大学院修士課程で慢性疾患看護専門看護師養成教育を開始し、糖尿病看護をサブスペシャリティとした専門看護師 9 人が誕生するまでに 10 年を要することとなりました。

誕生した専門看護師と一緒に始めたのが、看護ケアリングの考えを基にした糖尿病患者への看護ケアの開発です。能力の喪失や機能不全をめぐる人間独自の体験としての病気（illness）としての糖尿病は、その発症過程においても、療養過程においても、当事者としての糖尿病患者は自己理解、つまり生きていることの根幹を生活の中に問うことが求められます。そこで本研究では、P・ベナーらのいう「人はそれまでの経験を通じて形成された特定の自己理解を背景にして病気を体験していく」という考え、及び「看護師は、患者が

気遣いを取り戻し、生きていることに意味を見だし、人とのつながり・世界との結びつきを維持または再建できるように手助けすることができる」という考えに立って看護ケアを開発しました。最終的に「P・ベナーらのケアリング理論をもとにした糖尿病患者へのエンボディメントケア」と、このケアの 4 つの実践プロトコルの開発と検証をしました。次に、本ケアで開発した技能を伝承するための学習支援プログラムの開発と人材育成を行い、94 名の看護実践者を育成しました。この学習支援プログラムの成果は、本学看護学科カリキュラムに導入したコミュニティオブプラクティスの考え方に立った「学びのグループゼミ」に生かされています。

これらを経て、今回報告する「『糖尿病患者へのエンボディメントケア』の効果検証とその実用化への方略の検討」に進むことができました。結果としては、本ケアの介入によって、合併症を持つ糖尿病患者が血糖を良好にコントロールできるようになる効果が期待できること。また、本ケアは患者の健康感に影響することが明らかになりました。看護師の支援を得て健康管理法を獲得していくことで、血糖を含めた体調を良好に管理することができる可能性があることが分かりました。



「COPの考えを取り入れた「学びのグループゼミ」での学生の学び」研究打ち合わせの野並教授



資料を整理中の野並教授

家政学科 フィールドワーク「防災対策とインフラ」を学ぶ

神戸女子大学家政学部 家政学科2年生の専門科目「フィールドワーク」(担当：平田 耕造教授・大森 正子准教授)では、興味や関心のあるテーマを設定し、教室を離れ調査研究を行っています。

平成29年度のテーマは「防災対策とインフラ」でした。履修している15名の学生は防災に関する知識を深め、関西電力神戸支社、大阪ガス泉北製造所、神戸市水道局の奥平野給水拠点を見学し、災害時にインフラの拠点となる事業所ではどのような対策がとられるか調査しました。

そして、平成29年9月23日(土)には、NPO法人プラス・アーツの防災教育研究所長・神戸事務所長 室崎友輔氏を講師に迎えて、地震等で電気・ガス・水道などのインフラが甚大な被害に遭い、ライフラインが復旧するまでの3日から7日間を身の回りのもので工夫し、自力で生活するという防災対策の実践演習を須磨キャンパスで行いました。

午前中は、屋外で食事作りに挑戦。牛乳パックを燃料に空き缶で一人ずつご飯を炊き、ビニール袋で「乾物サラダ」、大釜でみそ汁を作りました。広告を折って作った食器にビニール袋をかぶせてご飯とサラダをよそい、上部を切った耐熱ペットボトルにみそ汁を注ぎ食事をしました。

午後は、体育館等で避難生活をする場合、少しでも快適に生活できるようにする方法を考えました。プライバ

シーをできるだけ確保し決められたスペースを有効に使うことを念頭に、ダンボールで避難所の間仕切り及び男性が座っても壊れない丈夫な椅子とトイレを作る課題に挑戦しました。

2グループに分かれ1時間の制限時間内で、人目を気にせず睡眠が取れるような避難所の空間、収納スペースのついた椅子、衛生面に配慮したトイレが出来上がりました。製作物ごとに、創意工夫をしたところを発表し、室崎氏からは両グループとも課題をクリアし機能的な作品になっていると評価されました。



ダンボールで避難所の間仕切りを作る学生たち



男性が座っても大丈夫なことを証明する
室崎友輔氏



ダンボールの椅子。
手帳とペンの収納もできる

この他にも、当日は応急手当の方法や多方面に役立つロープワークも学びました。

学生たちは、「学んだことを災害が起きた時には役立て、自分だけではなく家族や周りの人を助けたい」「身の回りのものを使って工夫すれば、災害時に対応できることが分かった」「毎日便利な生活をしていることが分かり、平穩に過ごせていることに感謝したい」と感想を述べていました。

一人ひとりが日頃から災害に備え、自分の努力で被害を少しでも減らせるための「自助」がいかに大切かを実感し、12月の発表会では研究成果をお互いに確かめ合い、防災対策を真剣に考え、災害時には何をすべきか、学生たちは「フィールドワーク」の授業でしっかりと学びとりました。



発表会の様子



ご飯を炊くために空き缶に穴を開け、燃料の牛乳パックを裁断する様子



下の缶に穴を開けてコンロにして
ご飯を炊く



炊き上がったご飯



ガス・電気を使わず作った昼食。
ご飯、みそ汁、乾物サラダ

インドネシア ウダヤナ大学 留学生紹介

2016年9月から神戸女子大学文学部 日本語日本文学科で学んでいた、インドネシアのウダヤナ大学からの留学生PUTU CITRA ARISUTA (プトゥ チトラ アリスタ以下チトラ) さんが、2017年8月に1年間の留学を終えて帰国しました。

チトラさんは、小学校2年生のときから日本語に興味を持ち、話せたらいいなという夢がありました。

中学生になって日本語のクラブに入って勉強を始め、大学に進学して本格的に日本語を学びました。母国では日本人と話す機会が少ないことや日本文化に直に触れたいという思いから留学することを決意しました。



ライブラリー・commonsでのチトラさん



研究発表の様子



歓迎会でバリダンスを披露

神戸女子大学では、社会人として通用する話し方、聞き方の能力を身に付けることを目的にした留学生を対象とした日本語の授業で、聞く・話す力を磨き、読み書きでは、毎週800字の作文を書く課題をこなしました。帰国前には日本の新聞が読めて、会話もスムーズにできるようになりました。

留学の成果として「AKB48の歌詞におけるオノマトペー日本語からインドネシア語への翻訳ストラテジー」という表題の論文を書き上げ、日本語日本文学科の教員や学生を前に発表しました。この論文は、アイドルグループAKB48の歌詞に多く含まれるオノマトペ（擬声語・擬態語）が、オノマトペが少ないインドネシア語の歌詞に翻訳された場合に使用する翻訳ストラテジーの分析を行うという興味深いものです。



日本繊維機械学会第70回年次大会の特別企画のきものショーに出演

授業以外でも積極的に日本文化に触れ、花が好きなチトラさんは華道部で生け花を学び、家政学部家政学科の授業で浴衣を縫い、着付けも自分でできるようになりました。

日本各地を旅行し、特に北海道の雪まつりで初めて雪を見た時の感動が今でも鮮明に残っています。東京や大阪の大都会の良さも分かりましたが京都・奈良に代表される古い日本の文化により心惹かれたということです。

ウダヤナ大学に帰ると12月に卒業するために卒業論文の仕上げに取り掛かります。卒業後は、日本に関わる仕事に就いて日本語を使った仕事をし、これからもインドネシアと日本をつなぐ友好の輪を広げていきたいと語っています。



中島實学長から修了証授与



修了式後の記念撮影



- 1983年 ハワイ大学(米国)
- 1993年 ケント大学(英国)
- 1997年 フライブルク大学(独国)
- 2000年 華南師範大学(中国)
- 2006年 オークランド工科大学(ニュージーランド)
- 2006年 ピッツァー大学(米国)
- 2010年 ウダヤナ大学(インドネシア)

- 2010年 西安工程大学(中国)
- 2010年 カセサート大学(タイ)
- 2010年 高麗大学(韓国)
- 2011年 チェンマイ大学(タイ)
- 2011年 カリフォルニア州立ポリテクニク大学ポモナ校(米国)
- 2014年 静宜大学(台湾)
- 2017年 アイルランガ大学(インドネシア)

タイ・チェンマイ大学国際交流プログラムのスタッフ来学

神戸女子大学が国際交流協定を締結しているタイのチェンマイ大学から国際交流プログラムの指導教員、スタッフ7名が、文学部神戸国際教養学科の「オフ・キャンパス・プログラムⅢ タイ・チェンマイ大学プログラム」(担当：野口 和美教授)の5か月間同大学に留学する学生へ事前説明をすることを主な目的として、2017年7月10日(月)から12日(水)の期間、須磨キャンパスを訪問しました。

カリーム先生、サコーン先生によるタイの国内事情やチェンマイ大学についての説明、タイ語や英語のレッスンは、留学する学生の現地での学習成果の向上につながります。また、タイ留学を終えて帰国した学生もレッスンを受けることができ、留学成果の確認やタイ語を継続して勉強する励みにもなります。

最終日にはライブラリー・commonsでスタッフの女性メンバーがタイの伝統舞踊を披露し、鮮やかな衣装と優雅な舞踊で観客の学生と教職員を魅了しました。希望する学生にはタイの伝統舞踊のワークショップも行われ、タイの文化の一端に触れることができました。



タイの伝統舞踊のワークショップの様子



カリーム先生(左)とサコーン先生による語学のレッスン



スタッフによるタイの伝統舞踊

2017 オックスブリッジ英語サマースクール開催

イギリスの名門、ケンブリッジ大学とオックスフォード大学の学生が組織するOxbridge Summer Camps Abroadの学生(オックスフォード大学ザックさん、ケンブリッジ大学ナターシャさん)を講師に迎えて「オックスブリッジ英語サマースクール」を2017年7月24日(月)から8月4日(金)の期間、神戸女子大学須磨キャンパスで実施しました。

日本語日本文学科、英語英米文学科、神戸国際教養学科、史学科、教育学科、管理栄養士養成課程から19名の学生が参加して語学力の上達を目指しました。

このサマースクールの授業はすべて英語で行われ、リスニング力、スピーキング力の向上が望めるだけでなく、日本とイギリスの文化、生活習慣の違いなども同世代の学生から学べる魅力があります。同世代が興味、関心を持つ内容から国際的な話題についても授業に取り入れて多様なレッスンが展開されました。

本学の学生も華道、書道、箏曲などの日本文化を紹介するプレゼンテーションを行い、オックスブリッジの学生に剣道、弓道を体験してもらう機会を設け交流を深めました。

このサマースクールは短期間ですが、楽しみながら同世代の学生と英語でコミュニケーションがとれ国際交流ができると参加した学生に毎回好評です。



ナターシャさんとザックさん



剣道体験



レッスンの様子



日本文化紹介のプレゼンテーションの様子



弓道体験